

解 説

篁 日向子

ハルドウン・タネル (Haldun Tanel, 一九二五—一九八六) は、トルコの短篇小説家・劇作家。彼の名前を冠した文学賞 (ハルドウン・タネル短篇小説賞) や劇場 (イスタンブール市立ハルドウン・タネル劇場) があり、生誕一〇〇周年にあたる二〇一五年には、回顧展やイベントが開かれ、二〇一六年にかけてヤブ・クレディ出版社が全著作 (短篇小説集、戯曲、エッセイ) を新装復刊した。

ハルドウン・タネルは最後のオスマン帝国議会議員でありイスタンブール大学 (İstanbul Darülfünun) の国際法の教授でもあった父アフメト・セラハッティン・ベイと母セザ・ハヌムのもと一九一五年に生まれた。三五年、ガラタ・サライ高校を卒業後、政治経済を学ぶためドイツのハイデルベルク大学に留学したが、結核治療のため四年間の休養を余儀なくされた。イスタンブール大学文学部等にて学業に励むかたわら副業として短篇小説の執筆を始め、次々と文芸誌へ掲載した。五三年、ニューヨーク

ク・ヘラルド・トリビューン主催の小説のコンテストで「シシュハーネに雨が降っていた」(Şişane'ye yağmur yağıyor) が優勝、五五年には「十二時一分前」(On iki'ye bir var) でサイト・ファイク文学賞を受賞した。またこの時期に劇作を始め、四九年に最初の戯曲『時の人』(Günün Adamı) を執筆、五四年、演劇に関する専門的知識を学ぶためウィーンへ渡った。プレヒトヤカバレ演劇の影響を強く受け、帰国後、劇作家や劇団の設立を精力的に行ないながら大学や演劇学校にてドラマトウルギーの講義を行なった。

本作「サンチヨの朝の散歩」(Sancho'nun Sabah Yürüyüşü) は六四年に執筆された。この年には戯曲『ケシャンル・アリの叙事詩』(Keşanlı Ali Destanı) の初演が大成功をおさめている。日本では東京オリピックが開催され、トルコではTRT (トルコ国営放送) が発足した年である。

作品のストーリーそのものに大きな起伏があるわけではないが、サンチヨと「ヒュルヤのパ」の足音がメトロノームのように軽快なテンポを刻み、傘が地面を叩く音やサンチヨの唸り声、サンチヨの奇妙な動きがそこへ加わることではつきりとした緩急がついている。さらに天候の変化やサンチヨの思考の流れを描き、視点がカメラワークのように切り替わることで、何気ない犬の散歩が短篇映画のようにドラママイ

ックになっている。

一見するとコミカルな作品であるが、ほろ苦さも印象的である。かつて娘の「ヒュルヤ」が家にいたころは賑やかであったことが想像されるが、留学で不在の今、夫婦は互いに秘密を抱え、表面上取り繕っている。サンチヨは主人の人生を自分の人生と切り離し、冷静に観察し、時に憐れみながら、『ドン・キホーテ』のサンチヨ・パンサのように付いていく。最後のシーンは、「巨人」の世界の中で犬も人間も同じくらい小さく無力に見える。

タネルのユーモアは、独特なオノマトペや、飼い犬の視点で人間界を見るところという作品構想、犬の名前(「サンチヨ」「ディオジエン(ディオゲネス)」)、政治家の風刺など様々な形でちりばめられている。言葉遊びや風刺、間テクスト性は、短篇小説、戯曲を問わずタネルの作品に共通して見られる。緻密に計算されつつも気取らない魅力こそが、彼の作品がトルコにおいて広く長く愛される理由であろう。